

二〇〇九年二月二五日（奈良公園参加者一名）

茅葺の千木の崩れや冬ざるる	わかば
練塀の裏参道の散紅葉	"
金堂の鴟尾輝やける小六月	"
抜き出し塔の九輪や冬木立	菜々
冬日差す若草山の天辺に	"
茶室へと錦繡を敷く散もみぢ	"
昨夜の雨雫耀よふ紅葉かな	宏虎
懐に大仏抱き山眠る	"
色変へぬ松の樹間に塔見ゆる	ひかり
今年鹿餌を遠目に近よらず	"
茅葺の茶室小春に全開す	きづな
散紅葉な踏み行きそ苔の庭	"
就中若草山の枯れいそぐ	かれん
雨ふむむ苔に山茶花散り敷きぬ	"
みぎひだり落葉の駆ける風の道	ぼんこ
ぬきんでて一樹のもみぢ池鏡	つくし
采女身を投げし池とや冬ざるる	はく子
冬うらら若草山に薄日さす	満天

吟行句会みのる選

二〇〇九年二月二五日（奈良公園参加者一名）